

熊野古道沿いの高専と地元産業

和歌山高専は、県都和歌山市から南へ50kmの御坊市ごぼうの郊外、紀伊水道を挟んで四国に面する海岸に立地する。校庭の西端は海岸、逆側の校地東端は熊野古道に面しており、能や歌舞伎で有名な安珍が清姫から逃れて道成寺に駆けたとされる道のりの、大詰めに近い場所に当たる。安珍を追う清姫が擦り切れた草履を脱いで松の木に懸けたと言われる「清姫の草履塚」という石碑も、学校の北隣の集落に残る。その先、渡し舟に乘れぬ清姫が蛇に化けて渡った日高川、そして道成寺の鐘の話に至る。その草履塚や学校の周囲は、今や所狭しと花卉栽培や野菜・果物栽培の温室が並んでいて、古道を歩いて中世に思いを馳せるには、やや建て込み過ぎた集約農業地帯である。

さて、高等専門学校は全国に現在57あり、その多くは40数年前の高度経済成長のまっただ中に開設されたが、配置を見ると8割以上の学校が、御坊市のように県庁所在地以外の都市に位置している。設立当時の社会的要請は、高等学校における3年間の職業教育と、大学工学部における4年間の工学教育だけでは不足する中堅技術者を、中学卒業後5年間の一貫教育により、集中的に育成してほしいとの声であった。立地も、同じ国立高等教育機関の間で、国立大学の工学部等と距離を置いて計画されたものと推察できる。結果、高等教育機関の全国分散配置による教育振興、就学機会の提供に、40数年の歴史の中で地道に成果を上げてきた。これからも県内にある6つの高等教育機関の中で、県中南部にただ一つ離れて位置する学校として、科学技術の高度化に沿った創造的・実践的な技術者の育成をこの地で続けたい。

全国の高専の卒業生は、57校でおおよそ年間1万人弱である。現在は、大学工学部の3年生に編入するなど、進学する者が4割強あるので、高専卒業後に20歳で新規に就労する数は5千数百人になる。近年の全国農業新規後継者数が年間5千人前後と聞いているが、奇しくも近い数字になっている。

和歌山高専では、現在卒業生の就職先のうち、県内就職は2割前後で、残りの県外就職先は、阪神や京浜等に所在する大手・中堅企業が多くなっている。

日本の工業発展を支える技術者を農業地帯の中で育て、人材の都市流出を後押ししている教育機関という面は否定できない。しかし、在学する学生は地域性を生かした様々な活動に取り組んでおり、地元森林組合の協力を得て、植林、下草刈り、間伐などの環境ボランティア活動をしている学生グループは、昨年、県知事表彰をいただいている。

国際交流に目を転じると、和歌山高専では、3年生から5年生までに15名のアジア諸国からの留学生が日本人学生と同じ教室と一緒に授業を受けている。日本を含めたアジア諸国の仲間同士が寮で共に生活し、クラスメイトとして共に学ぶことから、本物の国際理解の心を若い時に身に付けられると考える。高専で学ぶアジアからの留学生は、非常に優秀であり、帰国後の母国の社会発展を担い、日本との架け橋になるという強い動機付けを持つ。彼らが真剣に学ぶ姿から日本人学生が教えられることも数多いと強く感じる。

我が国の製造業は、次第に海外に生産拠点を移す例が増えており、高専出身者が国際的に活躍する機会間違いなく増加している。当校でも中国の上海電機学院との間で、毎年相互に10日間ほどの短期留学事業での交流を行っているほか、今秋には、本校から初めて中国に長期の留学生を1名派遣する。これからも、双方向での交流を一層発展させていきたい。

また、地元との連携・協力を進めるため、多くの高専では地域共同テクノセンターを設置して、産業界の動向や要請を十分に吸収した技術者教育・研究を推進している。和歌山高専が行っている産学共同研究や地元産業への技術協力の具体例として、「梅干工場の廃液浄化の研究」「海産物うつぼに含まれるコラーゲンの研究」「特産柑橘じゃばらの商品化の研究」「紀州材の利用製品化」「高齢者地区の防災避難シミュレーション」などがあげられ、農林水産品加工をはじめ地元ニーズに対応した研究テーマに積極的に取り組んでいる。

農林水産業が盛んな地域という立地条件を生かして、例えば、急峻な山間地域の水利や輸送技術、高齢者が利用しやすい機械の工夫、農業に合う長寿命の先端機器導入など、新たな農林関連部門での研究課題を求めて、熊野古道沿いの学校正門を広く地域に開いていきたい。

（国立和歌山工業高等専門学校 校長 堀江振一郎・ほりえしんいちろう）